PROJECT

先住民／少数者の工芸、衣装による表象
──アイデンティティの政治学とモノ研究

文
窪田幸子

共同研究 ● 表象のポリティックス──グローバル世界における先住民／少数者を焦点に（2013-2016）

本共同研究のめざすところ

この共同研究は、研究代表者である窪田が、長年にわたって行ってきたオーストラリアの先住民であるアボリジニの社会変化を中心とした研究を基礎とし、2000 年代にはいって大きく変化した先住民状況について展開してきた研究の流れのなかに位置づけることができる。これまでに行なってきた二つの共同研究（2005–2009 年国立民族学博物館（以降、民博）、および、2007–2012 年科学研究費補助金・基盤 A）では、政治的な国内外の情勢変化に対応して、「先住民」となっていく、または「先住民」を選び取らない、世界の少数者たちの多様な動きを比較検討し、彼らの多様なアイデンティティの状況を明らかにし、その成果の一部を出版した（窪田・野林 2009）。こうした研究のなかで、特に先住民／少数者が主流社会によって表象され、また彼ら自身が表象するような観光や展示などの場面に注目することが、彼らのおかれた状況を具体的に理解する上で有効であると考えるようになった。少数者である彼らが、絵画や工芸品、布などを製作し、それらが市場にのり、収集され、展示され、時には国際的な注目をあつめる。こうした彼らの作るモノによって、製作者は自己を表象し、また表象される。その背景にあるポリティックスは複雑であり、実像は大変わかりにくい。具体的なモノをきっかけとし、その動きを詳細に追い、社会経済的文脈に定位することから、このポリティックスの動態に迫りたいと考えている。

彼らが作るモノが注目されることによって、少数者のイメージと地位が向上することにつながり、経済的恩恵がもたらされる場合も多い。しかしその一方で、製作されたモノは、彼らを本質化する圧力となる場合もある。そしてまた、それらが商品化され、流通されることによって、借用や誤用もおこり、表象が希薄化される場面もある。収集され、展示する側の意図、展示されることの意味などの問題もある。また、これまでにあまり明らかにされてこなかったのが、収集されることに対する少数者の側の対応、反応である。彼らが製作するものモノは、自己表象、他者による表象の付与、表象の断片化などの複層的な側面がある。つまり、少数者の表象は、多彩なポリティックスのもとにある。そして、そのことは、少数者集団に対する各主流社会や国際社会の対応を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラリズムの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いのなかでおきている。この共同研究は、このような複雑な動態を、モノの製作、収集、流通という大変具体的な場面に注目することによって、先住民／少数者の側の対応という、日常実践のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相をなるべく具体的な形で明らかにすることをめざそうとするものである。

研究のすすめかた

この共同研究には、アフリカ、東南アジア、東アジア、オセアニア、カナダ、そして日本を対象地域として、モノにかかわって第一線で研究を行っている研究者に参加してもらっている。現在は、各々の分担者のこれまでの蓄積に基づく研究発表から、大きな地域的、社会的な広がりのなかで、少数者／先住民のモノをめぐる製作と流通、そしてその表象にかかわる現状と問題、論点を掘り起こし、共有するという試みをはじめている。経済、服飾、メディア、博物館展示など、地域だけでなく広いテーマから、先住民／少数者をめぐる問題について比較の視座を含めた議論がはじめられている。

研究会は、2013 年の 10 月から開始したが、これまでにすでに 3 回の研究会を開催した。今年度以降も、各年 5 回程度の研究会を開催する予定をしている。初回の研究会では、代表者の問題意識を共有してもらうことを大きな目的としたが、2 回目以降は、5 回程度の研究会（第 2 年度の中ごろまで）で、分担者のそれぞれの専門領域についての発表を行い、世界各地の広

研究会の構成

氏名	所属	役割分担	
（研究代表者）			
窪田幸子	神戸大学・教授	総括	先住民美術と表象
（共同研究員）			
青木恵理子	龍谷大学・教授	インドネシア	染織
池本幸生	東京大学・教授	東南アジア	工芸と開発経済
上羽陽子	民博・准教授	インド	染織
大村敬一	大阪大学・准教授	イヌイット	工芸と観光
川崎和也	佛教大学・非常勤講師	アボリジニ	美術
斎藤玲子	民博・助教	アイヌ、北米	展示
新本万里子	民博・外来研究員	ニューギニア	工芸
隅杏奈	神戸大学・博士後期課程	アイヌ	観光と展示
竹沢尚一郎	民博・教授	アフリカ	展示
田村うらら	京都大学・特別研究員	トルコ	工芸、絨毯
中谷文美	岡山大学・教授	インドネシア	染織
中村香子	京都大学・研究員	アフリカ	工芸
名和克郎	東京大学・教授	ネパール	工芸と観光
野林厚志（副代表）	民博・教授	台湾	工芸と観光
深井晃子	京都服飾文化研究財団・理事		服飾と民族
松井健	東京大学・教授	アジア、アフリカ	工芸
丸山淳子	津田塾大学・准教授	アフリカ	観光と展示
宮脇千絵	民博・外来研究員	中国	服飾
渡辺文	京都大学・研究員	オセアニア	美術工芸
吉田ゆか子	民博・機関研究員	インドネシア	観光と工芸

がりのなかで、少数者／先住民のモノの表象をめぐる現状、問題、それぞれのポリティックスの状況についての情報を共有しようとしている。各分担者の発表は、第2年度までに一巡させる予定である。そのうえで、例えば、「アイデンティティと表象」、「モノの流通と転化」、「美術と工芸の対立」、「衣装と表象」など、いくつかの研究のテーマを見出す予定である。そして、第2年度の後半、または第3年度から小シンポジウム形式での研究会に移行する。テーマごとに分担者を配分し、各自の2度目の発表を行なう。シンポジウム形式の研究会ではコメンテーターをつけ、議論を深化させる。これを、公開で行なう可能性も考えている。特にシンポジウム形式の研究会では、必要に応じてゲストを招聘し、この共同研究の構成で欠けていて、かつ必要な地域、分野からの発表をお願いする予定でいる。研究組織は、表の通り、 計21名のメンバーからなる。

ニューギニア東セピック州マプリック地区ニャミクム村、「私たちのデザイン」と呼ばれる網袋（2004年9月、新本万里子撮影）。

研究の進捗状況と成果

これまで3回の研究会で、すでにいくつかの興味深い論点があらわれてきている。初回の松井（敬称略、以下同様）による民藝と柳宗悦についての研究発表では、「表象と美」という大変重要な論点がこの共同研究の前提としてあることが指摘され、その後の議論を通じ、表象というテーマを論ずる上でこの問題を意識的に考える必要があることが了解された。第2回目には、新本、田村、野林の諸氏が発表した。新本によるニューギニアの網袋と自己集団の表象についての報告、田村によるトルコの絨毯と国家的表象の問題についての報告からは、表象の背景、主体、対象、文脈などが錯綜する各地の状況が明らかになり、「誰が、なにを、どのように、どのような文脈で表象する／されるのか」について、意識的に整理しながら議論することが重要であることが明らかになってきた。そして、野林による台湾原住民の衣装についての発表からは、表象には粘着性に強弱がある、という興味深い論点があらわれた。

第3回目には、岩立フォークアートミュージアムでの少数民族衣装の展示の見学と、中村、深井、池本の諸氏が発表を行った。中村によるアフリカ、サンブルの人々のビーズについての発表からは、歴史に埋め込まれた装身具が、社会経済的状況の変化のなかにあり、またそれが彼ら自身の表象となり、国家的表象ともなる動きが見えてきた。第3回目の研究会にあわせて行った見学と、館長の岩立からの説明によって、衣装の表象性というもう1つの重要な論点も明らかになったのだが、深井の発表により、ファッションによる日本性の表象という議論の広がりも見えてきた。衣装というある意味で直接的な表象にこだわって、より議論を深めていく必要性が明らかになった。そして、池本の発表による指摘によって、表象のポリティックスについて、開発経済の立場からの議論も重要であることが共有され、総合討論をへて、問題意識は共同研究員によって共有されてきている。このような研究発表を次年度の中ごろまで継続し、地域的、および社会経済的広がりのなかに、少数者／先住民の製作するモノを定位し、そののちのシンポジウム形式での研究会につながるような、注目すべきテーマを探りたい。

この研究会の最終成果は、出版の形で公開することを考えているが、最終年度に予定している3回の研究会では、基本的に成果出版に向けて、論考の読み合わせを行う予定である。この共同研究のもう1つの特徴は、広い年齢層、経験をもつ共同研究員の構成である。すでに一定以上の業績と研究蓄積がある、第一線の研究者と、博士号取得からまだあまり時間のたっていない若手研究者をバランスよく配置している。成果出版に向けては、このようなシニアの研究者からのコメント、指導によって、若手研究者のレベルアップも図れると考えている。

これまでにのべたように、この共同研究は、具体的なモノを手がかりに、少数者のおかれている社会経済的、歴史的状況に肉迫することが目的であり、彼らをとりまく見えにくい複雑なポリティックスの実像が、モノの動態をきっかけとしてつまびらかにできると考えている。表象をめぐる具体的なそれぞれのローカルな動きの報告と考察を積み重ねることで、現代社会の少数者をめぐる社会的な問題点を明らかにできるという見通しをもっている。そしてまた同時に、近年あらためて関心が高まっているモノ研究に対しても、人とモノとの関係を問い直す、アクターネットワーク理論（ANT）やアフォーダンスなどを考える視点を含め、これまでとは異なる新たな貢献ができることを目指したいと考えている。

【参考文献】

窪田幸子・野林厚志編　2009 『「先住民」とはだれか』 世界思想社。

くぼた さちこ

神戸大学大学院国際文化学研究科教授。専門は文化人類学。オーストラリア・アボリジニ研究を中心として、先住民研究を行っている。著書に、『アボリジニ社会のジェンダー人類学』（世界思想社 2005年）、『「先住民」とはだれか』（共著者 世界思想社 2009年）など。